

阪田寛夫の文学

河崎良二

帝塚山学院大学キャリア英語学科の河崎です。四十年間英文学の研究をしてきました。今日は英文学研究者から見ると、阪田寛夫の文学はどのように見えるのかという話をさせていただきます。学院の中の講演ですので、親しみと敬意を込めて以後、阪田さんと呼ばせていただきます。

阪田さんは多くの賞を受賞しておられます。『うるわしきあさも 阪田寛夫短編集』（講談社、二〇〇七）の年譜から主な受賞作を挙げてみましょう。

- ・ 久保田万太郎賞（一九六七年）放送劇「花子の旅行」
- ・ 芸術祭文部大臣賞（一九六九年）ラジオ作品「天山北路」
- ・ 第四回日本童謡賞（一九七三年）少年少女のための歌曲集『うたえバンバン』

- ・第七二回芥川賞（一九七四下期）「土の器」
- ・第六回日本童謡賞（一九七五年）詩集『サッちゃん』
- ・第一八回野間児童文芸賞（一九八〇年）叙事詩『トラジイちゃんの冒険』
- ・第三八回毎日出版文化賞（一九八三年）『わが小林一三 清く正しく美しく』
- ・第七回絵本にっぽん賞大賞（一九八四年）『ちさとじいたん』
- ・第一四回川端康成文学賞（一九八六年）「海道東征」
- ・第九回巖谷小波文芸賞（一九八六年）『まどさん』、『童謡でてこい』
- ・日本藝術院文芸部門第四五回恩賜賞（一九八九年）『まどさんのうた』
- ・第二〇回赤い鳥文学賞特別賞（一九八九年）『まどさんのうた』

優れた作家であったことはこの受賞歴が示しています。ところが、阪田さんご自身はそのように見ておられませんでした。そのことは詩「アホ」を見れば明らかです。

アホ

——アよりも、ホを高く発音すること

先頃「アホのサカタ」という歌がはやって

愚生^{ぐせい}は困却^{くせつ}焦慮^{せうりょ}した

アホを標榜^{ひょうぼう}してきたおれよりも

上手^{うわて}のサカタが現れた！

テレビのお客がしらけだし

サカタ氏いよいよ声をからして

「アホのサーカーター」と絶叫すれば

本家はひたすら窮するばかり

いつになったら

アホやなあ、とさげすまれて

ほんになあ、としみじみうけとめられる日がくるやろか

あかんあかん 一足先に呆^まけが来^きとる

〔含羞詩集〕河出書房新社、一九九七。64―65

自分をこのように見るところが阪田文学の特徴であると思います。

では今日の話に入ります。先ず、結論を述べます。阪田さんの文学は年代別に見ても、内容から見ても三つに分けることができます。

I. 讚美歌から童謡、詩、小説、エッセイへ

II. 「土の器」までの屈折した心、暗い小説

III. 「土の器」以後の阪田文学

IからIIIまでを一貫しているのは、熱心なキリスト教徒であった両親の下で、生れる前から讚美歌を聞いて育った人の文学であることです。父親は南大阪組合教会役員、母は教会オルガン奏者でした。

では、先ずⅠの讃美歌の影響について述べることにします。

Ⅰ. 讃美歌から童謡、詩、小説、エッセイへ

讃美歌を聞いて育った阪田さんは、戦地から九死に一生を得て復員した後、東京大学に進まれますが、東京でも従兄大中恩が始めた合唱団に入り、以後三年間、霊南坂日本基督組合教会聖歌隊で歌っておられます。戦争の傷を讃美歌を歌うことで癒しておられたと考えることができます。その後はずっと後まで、讃美歌の影響から美しく、優しく、また面白い詩、童謡、絵本を作られます。幼い頃には讃美歌の言葉をおもちゃにして、いたずら盛りの子どもらしい歌を作っておられます。その気持が大人になっても消えないところが、さすがに「サツちゃん」の作詞家だと思います。『詩集 サツちゃん』（講談社、一九七七）からお祈りと関わる詩を二つ読んでみます。

ああめん そうめん

ああめん そうめん

ひやそうめん

夕日にそめた

ひやそうめん

ぶりきたたいて

かんからかん

とうさんいびょうで

死んじやった

ああめん そうめん

ひやそうめん

夕日にまっかなひやそうめん

オイノリ

カミサマ

アシタハ

イイオテンキデスカラ

カワヘ ハマツテ クダサイ

ドンブリッコ アーメン

このような詩や童謡は多くの作曲家から高く評価されました。阪田寛夫作詞、従兄の大中恩作曲の「おなかのへるうた」などは皆さんご存知だと思います。

阪田さんの詩や童謡にはこのような子どもの純粋な心、いたずら心が一杯の作品が多く見られます。同じ系統の作品としては、小説では「土の器」の翌年に書かれた、いつまでも子ども以上に純粋な心を持ち続ける小学校

の先生のお話「陽なたきのこ」、あるいは詩人まど・みちおに会って詩の話を聞く短編「遠近法」など、エッセイでは『讚美歌 ころの詩』(一九九八)、『受けたもの 伝えたいもの』(二〇〇三) があります。

最後に挙げた『受けたもの 伝えたいもの』という心安らくエッセイ集に次のような興味深い話があります。

詩人高村喜美子さんの追悼会の帰途、まどさんを含む童謡、童詩の書き手六人が、喫茶店に立ち寄りしました。その時誰かが「昔教会に通ったことがある」と告白したら次々五人が、昔、キリスト教に関わっていたと表明し、最後にまどさんが、「私も、聖書もなにも分かんのに、昔教会に行つとつたんです」と申し訳なさそうに洩らされたから驚き喜びました」(日本キリスト教団出版局、二〇〇三。12)。

阪田さんを含む童謡の書き手が讚美歌と深く関わっていることを示す興味深い逸話です。

以上のことが、優しく、純粋で、ユーモアがあるという阪田文学のイメージを決定したと言つてもいいでしょう。では次に第二の特徴について述べてみましょう。

II. 「土の器」までの屈折した心、暗い小説

先に見た三つの詩にも現れています。阪田さんの詩には素直でない、屈折した心といったものが見られます。純粋なものは、この世の中では純粋なまま育つことが非常に難しい。純粋な心の子どもはどちらかといえば世間では弱い子どもである。弱い自分はダメな人間なのだという意識が多くの詩の中に書かれています。先ほど見た詩「アホ」もその一つでしょう。

では、なぜ幼い頃から阪田さんの心は屈折していたのでしょうか。それは阪田さんの純粋な性格のためである、

と言ってしまうにはあまりにも複雑な外的事情がからんでいたからです。簡単に言えば、軍国主義化し、国家主義化していった時代に幼年期、少年期を過ごされたことが原因です。阪田さんは一九二五年の生れですが、二年後の一九二七年が日本の第一次山東出兵、三一年、満州事変、三二年、満州国建国宣言、国際連盟脱退と、まさに日本が戦争に突き進んでいった時代だったのです。阪田さん自身も一九四四年、一九歳のときに入隊、釜山から南京、さらに揚子江を遡り漢口（現在の武漢市）まで行かれます。しかし、そこでアメーバ赤痢と胸膜炎で入院、終戦後は、ソ連軍、中共軍、国民政府軍と次々に占領者が変わる混乱状態の中、病院の炊事係として勤務し、一九四六年六月に復員しておられます。

こういう状況を考えれば、両親が熱心なキリスト教徒であったことが大きな重荷であったことは容易に想像できるでしょう。学校ではそれは敵の宗教であると見られ、友人からかわれたり、いじめられたりしたわけですから。やがて特高が阪田さんの家を見張るようになります。それらの好奇心な眼差しや監視のために、繊細な子どもであった阪田さんはキリスト教徒であることを隠そうとされました。しかし、熱心な信者であった母親はそれを許しませんでした。人々の前でも母親は隠したことを激しく叱責したのです。母親は周囲の敵意を跳ね返すように、誰よりも熱心に戦争に協力するようになります。こういう状況では、阪田少年でなくても、屈折し、自己卑下、コンプレックスに苦しむことになるでしょう。

コンプレックスによる悩みが顕著なのは、高知高等学校文科で一緒であった三浦朱門らと東京大学の学生時代の一九五〇年に始めた小説同人誌『新思潮』（第一五次）に発表された小説から、一九七四年に芥川賞を受賞する「土の器」までの二十数年の間に書かれた小説においてです。たとえば文芸誌『文学界』に発表された短編「男は馬垣」、一九六八年出版の『わが町』の短編もコンプレックスを基盤にした作品と言えるでしょう。

その冒頭に置かれた「宝塚」は帝塚山学院小学校時代の話です。仁川コロニーで十日間の入試問題の試験勉強

に出かけた時、憧れの宝塚スター春日野八千代の家に友人たちと出かけ、玄関の呼び鈴を押すが、すぐに逃げた話です。一九八六年出版の『戦友 歌につながる十の短編』（文藝春秋）の「あとがき」で『わが町』に触れて、「十篇が十篇とも、玄関先で呼鈴を押して逃げる趣がある」（285）と述べておられます。

しかし、一九三九年六月、中学二年、一四歳で洗礼を受けておられることが示しているように、阪田さんはいつも逃げておられたわけではないのです。それを、まるで自分がどうしようもない弱い、無能な人間であったかのように表現するところが阪田さんの特徴です。

幼い頃から面白いことが好きだった阪田少年は両親の信仰が重くのしかかる苦しみやコンプレックスを自嘲の笑いによって無にしようと思えたのだと思います。短編集『我等のブルース』（三一書房、一九七五）の「あとがき」に、『新思潮』以来の作品に触れて、次のように書いておられます。

自分を安全な立場に置いておいて、その自分を嘆く——というのが、それ以来二十年間、数少ない小説の中で私がとってきた手口のように、います。（216）

時間が許せば、ゆっくり『わが町』の短編について語りたいところですが、今日は省略せざるをえません。一言だけその特徴を「アベノ」という短編を取り上げて言いますと、死んでいても不思議ではない過酷な戦争体験を経て復員しておられるにもかかわらず、それまでの半生を題材とする短編の語りや終わり方には、読者を笑わせようとするサービス精神が見られることです。これは「土の器」までの作品に共通した特徴です。

では、阪田さんは一体小説で何を書こうとしておられたのでしょうか。幸い、その頃の文学に対する態度をはつきり述べた作品があります。一九七三年の六月から十ヶ月間『庄野潤三全集』の各巻末に書かれ、二年後に一冊

の本として出版された『庄野潤三ノート』です。庄野さんは帝塚山学院小学校の五年先輩であり、大学卒業後勤めた朝日放送での上司でした。『庄野潤三ノート』は作家論、作品論に分類されるものですが、お二人の交友にまつわる細かな事実が丁寧に描かれた、優れた作品です。

一九五〇年『人間』十月号に発表された庄野さんの作品「メリイ・ゴオ・ラウンド」に対する感想に阪田さんの文学観が明確に述べられています。

私は友人と同人雑誌も始めていたが、小説とはコムプレックスの捌け口だとは思えなかった。即ちそこでは人間の恥部・罪の意識・劣等感・復讐が描かれるべきであった。しかるに庄野さんのは市民生活と詩人的性情だ。私なら一番隠したいひよわな部分を、庄野さんは痛々しく露呈させている。何時刺し殺されるか判らぬ乱世に、腹を出して寝ているようなものだ。とてもひとごとだと見てはおれない。

これが、生まれて初めて接した庄野さんの小説に対する私の感想であった。つまり二十何年前の私のような平均的文学青年には、こんなきれいな文章がこんな世の中になぜ書かれなければならないか訳が判らず、作品全体が非現実的なものに見えたのである。(後略) (『庄野潤三ノート』冬樹社、一九七五。33-34)

この頃の阪田さんは太宰治に傾倒されていたと知ると、この文章で述べられていることがよくわかるでしょう。先の文の続きには庄野さんの次の文が引用されています。

ここに(家庭を描こうとする時)作者に最も要求せられるものは厳正なる歴史家の眼である。そして歴史家の眼のみが最も平凡で最も些細な、それこそ池の表面を時折走るさざなみに宝石のような真実の輝きを見

出すことが出来るだろう。(略)

そしてその眼は更に単なる傍観者、記録者のそれではなくて家庭というものの持つ宿命的な不幸に対して働きかけようとする善意と明識をもてる眼でなければならぬ。(「愛情に満ちた歴史眼を」昭和二十五年六月十五日、同志社学生新聞)

(『庄野潤三ノート』34)

二人の文学の違いと、阪田さんの文学がコンプレックスを基盤に書かれていることがよくわかります。阪田さんの場合、描く対象に向き合う姿勢と、語りの方が問題であると言えるでしょう。先ほど短編集『わが町』の一篇「アベノ」について述べましたが、阪田さんはコンプレックスを吐き出し、それを作品にするために自分を笑うという方法を取ってこられました。しかし、それでは作品として弱いのです。「自分を安全な位置において自分を笑う」という方法を取っている限り、読者を作品の世界に引き込むことはできなかったでしょう。もしも阪田さんが庄野潤三の全作品を熟読し、批評することで、小説の語りについて熟慮されていなかったとしたら、『わが町』以後の阪田さんの小説は違ったものになっていたかもしれません。

一九五一年、二六歳で大学を卒業した阪田さんは大阪に戻って結婚し、朝日放送に勤められます。一時東京支社に勤務した後、一九六三年、作家になることを決意して退社されます。しかしそれ以後の主な仕事は、一九六三年から十年間NHKの「みんなのうた」の歌詞を担当したり、合唱組曲やミュージカル、ラジオドラマ、童謡などを書く仕事でした。

転機は一九七三年に來ます。それが、先ほど述べた、六月より刊行の『庄野潤三全集』(全十巻)の各巻末に「庄野潤三ノート」を翌年まで書き続けるという仕事でした。七月には母の死。翌一九七四年十月に母の死を描いた小説「土の器」を発表。その作品で、第七二回芥川賞を受賞されます。「庄野潤三ノート」という仕事が阪田さ

んの文学を変えたと考えて間違いないでしょう。では、阪田さんの文学を変えたものは何か。それは先ほど引用しました庄野さんの言葉から想像できるでしょう。

「土の器」が『文学界』に発表されてから五ヶ月後に同じく『文学界』に発表された短編、作曲家で教会のオルガン奏者を半世紀以上続けている叔父大中寅二を描いた「足踏みオルガン」についての庄野さんの言葉を見ると、阪田さんが身につけられたものが何かがよくわかります。

どこまでも具体的に徹する。具体的でないことは一行といえども書かない。「足踏みオルガン」はそういう覚悟で貫かれているかのように見える。これを支えているのは細やかで落着きのある観察と叡智。私は読んでいて何度となくイギリスの散文を思い浮べた。(後略)

これだけの堅牢な文章をいつから作者は身につけたのだろう。(後略)

(『土の器』文藝春秋、一九八四。235―36)

『庄野潤三ノート』を執筆することを通して、小説とはコンプレックスを安全な位置から描くのではなく、家庭というもの、あるいは人間というものの持つ「宿命的な不幸に対して働きかけようとする善意と明識をもてる眼」で描くものだ、という庄野さんの言葉に阪田さんは深く共感されたのだと思います。なぜなら、芥川賞受賞作「土の器」は、そのような目で、母の骨折から死に至るまでの数ヶ月を描いたものだからです。

ところで幼い頃からのキリスト教をめぐるコンプレックスという問題から見ますと、「土の器」において最も重要なのは次の場面でしょう。母の最後が近づき、言葉が混乱するようになり、再入院する。ある夜、母親の介護の番にあたる。ひどい下痢のために一時間に三、四回おしめを換え、明け方まで点滴注射をするために母親の

腕を抑えておくという仕事を終えて、夙川の兄の家に帰った後の場面です。

その朝ひとり夙川へ戻り、無人の家の広い居間の絨緞にパンツ一つで坐っているうちに、どうしてもここで神に祈らずにはおれなくなつた。正確には母の神さまに、である。グラントピアノの腹の下に頭をつっこむように、——母が私の家のソファベッドでちんまり坐つて手を組み合わせた時と同じ格好をして始めたのだが、言葉の方は「天に在いまます父よ」という風にはいかなかった。形を履まないからいきなり「こんなに最後の最後まで苦しみばかりでかわいそうです」と、祈るよりは糾ただす調子になつてしまつた。私は思い直して、「何か最後に母に喜びを与えて下さい」と頼み、それからつけ加えて（あとになつて困るとも思わずに）、「私はもう神を否定するようなことを喋つたり書いたりしません」と言つた。

（『土の器』148—49）

非常に感動的な場面です。阪田さんはここで神と約束をされたわけです。これまでの態度を改めると誓われたわけです。

これをイギリス文学と結びつけてみますと、十七世紀半ばに古代カトリックの教父聖アウグスティヌスが書いた『告白』が英語に訳され、それ以後とりわけピューリタンの間で多く書かれた靈的自伝に近いと言えるでしょう。彼らはアウグスティヌスの『告白』を手本に自らの半生、とりわけ神をないがしろにしてきた若い時代を、信仰を確かなものにした後に振り返り、過去の罪を記述したのです。

そういう意味で、「土の器」へと至るそれまでの阪田さんの小説はアウグスティヌスの『告白』や十七世紀イギリスの靈的自伝の、墮落した生活の告白に近い意味を持っていると言えます。夙川の兄の家での祈りで、神を

否定しないと約束したことで、それまでの霊的自伝に近い短編の下にあったコンプレックスは消えるわけです。

Ⅲ. 「土の器」以後の阪田文学

どの霊的自伝にも見られることですが、「もう神を否定するようなことを喋ったり書いたりしません」と誓ったからといって、阪田さんの信仰がその後すぐに堅固なものになったわけではありません。それは、「土の器」以後、数年かけて、幼い頃から馴染みながら、逃げておられたキリスト教の問題に正面から向き合うことによつてなされるのです。

先ず芥川賞受賞の二年後の一九七六年に、義理の父が戦時中に教会を離れ、神道、仏教などを取り入れた独自の信仰を抱くようになったこと、そのことに子どもたちがどのように反応したかを、家に残った末娘の目から静かな筆致で描いた短編「冬の旅」が書かれます。同じ年に同じ主題を義理の父の人生を幼年時代に遡って、荒々しいタッチで描いた中編『背教』が書かれます。その翌年の一九七七年には幼い頃から持っていたキリスト教信仰に対する疑問を追求し、阪田さんの家族を信仰に導いた宮川経輝牧師の生涯を辿る『花陵』が書かれます。

『花陵』では、阪田さんの両親が信者であった大阪基督教会と、牧師宮川経輝を取り上げ、なぜ教会が国家主義と結びついたのか、その独自の信仰の根幹にあるものは何かを、熊本への取材旅行を含めて描いておられます。宮川経輝を初めとする熊本バンドと呼ばれた熊本洋学校の生徒のこと、彼らに聖書を読むように勧めたアメリカ人教師ジェーンズ、江戸末期から明治初めにかけての熊本の思想的状況をその指導者の一人横井小楠にまで遡って調べ、描いておられます。

実は、この問題は二六年前の一九五一年に東大の卒業論文「明治初期キリスト教の思想的立場」で取り上げられた問題でした。それはその八年後、朝日放送に勤務しておられた時に、芸術祭参加放送劇「花岡山旗揚げ」として再び取り上げられた問題でした。それは、阪田さんが幼い頃から疑問に思っておられたことだったので。信仰という神と自己との関係という内面的な問題と、それとは水と油であるはずの国家に身を捧げることを求める国家主義とが、なぜ宮川経輝を初めとする熊本バンドの間で結びついたのか。それは、熊本で独自に発達したキリスト教信仰であり、異端だったのではないかと疑問です。

戦争へと進んでいった当時の日本の政治、思想、信仰の問題を掘り起こすことになりましたから、暗く重い小説なのですが、救いは宮川経輝の孫で牧師の宮川経裕さんの毅然とした姿と言葉に見出すことができます。阪田さんが年来の疑問をぶつけられるのに答えられる宮川経裕さんの言葉には、日本におけるキリスト教信仰のあり方に対する揺るぎない自信と情熱が感じられ、救われる思いがします。『花陵』からその部分を引用します。

イエスはわが救い主である、故に神から下されたものとして存在するわけだ。大事なものはなぜナザレのイエスがわが救い主になったか、ということ、その一歩手前で「人か、神か」と言い合っても、ただの理屈です。

——（文藝春秋、一九七七。184）

経裕さんは、熊本バンドの真摯なキリスト教の把握というものを、外側の形から理解はできない筈だと言った。経裕さんが祖父を見る目は、相手を発光体として、その輝きを見つめている。これに較べて私の方は地に散らばる影だけを見つめて「暗い暗い」と叫んできたようだ。その違いがよく判った。要約には、自分や自分の不安・妄想をおさえて、向こうの光だけを認めるようにしたい。（186）

『花陵』を読みながら、十七世紀イギリスの靈的自伝を研究してきた私は、ほぼ暗記するほど聖書に没頭し、聖職者ではないにもかかわらず説教をして牢獄にいれられたり、迫害された二人の人物を思い出しました。ジョン・バナヤンとジョージ・フォックスです。バナヤンは『罪人の頭にかしらに恩寵溢るる』という靈的自伝と、主人公クリスチャンが天の都に至るまでの寓意物語『天路歷程』を書きました。フォックスは信仰において重要なのは聖書のみであり、静かに祈る時に神が体の中に入ってくると説いた、一般にはクエーカーとして知られている宗派を起こした人物です。クエーカーは異端として、十七世紀のイギリスで激しい迫害を受けました。しかし、彼の信仰は世界中に広まり、日本には明治十年代末に、日本で最初のクエーカー教徒となった新渡戸稲造の紹介で布教が始まり、一八八七年には現在の普連土学園の前身フレンド女学校が設立されました。ハンセン病患者の治療にあたった精神科医で作家でもあった神谷美恵子の母親がフレンド女学校の卒業生です。戦後で言えば、ララ物資を送る活動の責任者はクエーカーのエスター・ローズでした。ローズは、同じくクエーカーの教師の後任として、皇室の英語教師となっています。不思議なことに日本とクエーカーの繋がりは深いのです。

明治期以降の日本の道徳の問題にもキリスト教は大きな影響を与えています。既に述べましたが、『武士道』という著書で知られている新渡戸稲造は日本の最初のクエーカー教徒です。新渡戸稲造は、明治の新しい日本の道徳は、それまでの武士の道徳をキリスト教に接木して生き延びる以外にないと説きました。それが『武士道』です。

同じように、日本組合基督教会の三指導者海老名弾正、小崎弘道、宮川經輝ら熊本洋学校の学生を中心に結成された熊本バンドを中心とした日本のプロテスタント信仰も儒教を基にし、日本の独自性を重視しました。そのため、彼らはほぼ同じ時期に形成された天皇を中心とした国家主義と関わっていったのだと思います。

阪田さんにとって、戦前、戦中のキリスト教の問題は後にさらに広がっていきます。その一つが、信時潔がが作

曲した「海行かば」です。それは昭和十五年、皇紀二千六百年を祝う北原白秋作詞、信時潔作曲の奉祝賀曲「海道東征」のレコードと一緒に録音され、ラジオで繰り返し放送されて、全国に広がりました。一体なぜ「海行かば」に魅了されたのだろう。これもまた阪田さんにとって戦中からずっと気になっていた問題でした。既に一九六一年十月、阪田さんは朝日放送勤務時代に、正月の特別番組として、「海道東征」の再演を実現されました。

作曲者信時潔は旧制大阪府立市岡中学出身で、山田耕筰とともに戦時中の国民的大作曲家でした。戦時中、この二人の音楽家から学んだ従兄の大中恩からの話や、その曲を中之島の大阪朝日会館で聞いた思い出、そして信時潔へのインタヴューを混じえて描かれたのが、一九八六年の小説『海道東征』です。第一回川端康成文学賞受賞作です。

この中でもっとも興味深いのは、信時潔の父親が牧師であることです。それは、阪田さんと河合隼雄、谷川俊太郎、池田直樹とのシンポジウム『声の力』の中で、次のような文脈で言及されています。

谷川（前略）戦時中に、勝ったときは「軍艦マーチ」で、敗けたときは「海行かば」がニュースの前に流れていて、なぜかあの「海行かば」がすごく好きで、母親にねだって買ってもらったのが、僕のレコード第一号なんです。

阪田 あれは讚美歌系ですね。（後略）

阪田 信時潔は牧師の三男坊だったんですけど、あれができたときはちょっと感激しましたね。音のハーモニーがいいですね。（後略）

阪田（前略）で、やっぱり讚美歌系だから、結局鎮魂歌になったんですね。実際、英霊を迎える時に、街の楽隊もやってきましたね。だからあれは、やっぱり讚美歌なんです。

谷川俊太郎が「海行かば」を好きだったという発言に驚きましたが、それ以上に「海行かば」が讚美歌であるという阪田さんの言葉に驚きました。当時の準国歌として国家主義、軍国主義を支えた「海行かば」が実は敵の宗教の讚美歌系であったということは、明治以降の日本というものがいかに深く西欧の影響を受けているかを物語るものでしょう。それは新渡戸稲造の『武士道』にも言えることです。

作家阪田寛夫さんの特徴は、このような大きな、重い問題を含んだ作品を発表しながら、同時に童話「サツちゃん」に繋がる優しい童話や詩、短編を書き続けられたことです。

多方面にわたる活躍をされた阪田さんの文学を研究することは、明治以降の大阪、帝塚山の文学を研究することに留まらず、日本の近代化という大きな問題を政治、宗教、文学、音楽の分野から解明することになります。根気のいる、大きな仕事ですが、皆様の中に、この文学会の会員となつて、果敢に挑戦してくださる方が現れることを期待して私の話を終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございます。